5章

【問題】（演習）

出典…中村稔『日の匂い』〈切り倒されたイチョウ〉／オリジナル問題

文章略解

経済効率追求による自然破壊に対して、自然が再生不可能であることを論拠に反対する、世上見られる自然保護論は、根本の部分で効率論に立脚しており、生あるもの自体を尊重する発想に欠ける点で、経済効率を追求する立場と大差ないように思える。それよりも、生あるものそのものへの敬意をもって自然と対峙するほうが、自然との豊かな関係を保ち、自然本来の姿を見ることができるのではないか。

解答

(一) 定時に運行させなければならない鉄道会社員の側の事情を考慮せず、自身の、人間的交流への期待にのみ基づいて抱いた感慨だから。

(二) 効率性の追求を最優先し、その目的達成の上で必要性の薄いさまざまな人間的価値を排除してゆくということ。

(三) 四季の推移を感じ、生あるものと交感して生きるということ。

(四) 再生不能であることを理由とした自然破壊反対の姿勢には、生あるものをそれ自体として尊重する発想が欠けているから。

【問題】（演習）

出典…『唐詩選』 十 王世懋『芸圃擷余』 ／ オリジナル問題

書き下し文

〔Ⅰ〕桑乾を渡る　賈島

幷州に客舎して已に十霜　帰心　日夜　咸陽を憶ふ

端無くも更に渡る　桑乾の水　却つて幷州を望めば是れ故郷

〔Ⅱ〕一日偶〻賈島の桑乾の絶句を誦し、謝枋得の注を見るに、云へらく、「旅寓十年、交游歓愛、故郷と異なる無し。一旦別れ去れば、豈に能く情無からんや。桑乾を渡りて幷州を望み、反つて以て故郷と為すなり」と。覚えず大いに笑ふ。拈りて以て玉山の程生に問ひて曰はく、「詩此くのごとく解するや否や」と。程生曰はく、「向に此くのごとく解せり」と。余謂へらく、「此れ島の思郷の作なり、何ぞ曾ち幷州と情有らんや。其の意久しく幷州に客となりて、遠く故郷に隔たるを恨む。今惟だに帰ること能はざるのみに非ず、反つて北のかた桑乾を渡り、還つて幷州を望めば、又是れ故郷なり。幷州すら且つ住まるを得ず、何ぞ況んや咸陽に帰るを得るをや。此れ島の意なり」と。

現代語訳

〔Ⅰ〕桑乾河を渡る　賈島

（ここ）幷州での旅暮らしも、もう十年になった。

（その間、故郷である都に）帰りたい一心に、明けても暮れても（都の）咸陽〔＝長安〕のことを思い続けてきた。

（ところが、このたび）思いがけなくも、さらに桑乾河を渡って（この土地を去り、北の方へ）行くことになった。

こうして幷州の方を遠くふりかえって眺めると、（ただでさえ故郷から隔たっている幷州の町が）今はかえってそこも故郷のように（遠く離れたところになってしまうのだと）思われる。

〔Ⅱ〕ある日、偶然、賈島の「桑乾河を渡る」という絶句を読み、謝枋得の（この詩についての）注を見ると、そこには次のようにあっ

た、「旅先に住むことが十年になり、（幷州の）友人との交わりも深まり、いろいろな喜びや愛情も生まれてきて、故郷と変わるところがない、ひとたび（この地に）別れを告げて立ち去るとなると、どうして（惜別の）情が起きないことがあろうか（、いや、きっと起こるはずだ）。桑乾河を渡って幷州を遠く眺め見ると、かえって（この地が）故郷のように思われるのである」と。（この注を読んで、私は）思わず大笑いしてしまった。（そこで、その注を）取り上げて、玉山の程生に尋ねて言った、「この詩は、このように解釈するものか、どうか」と。（すると）程生が言った、「以前からこのように解釈していた」と。（この詩の解釈について）私は次のように思う。「この詩は、賈島が故郷を思慕する作品である。どうしてまた、幷州に心ひかれる思いがあるだろうか（、故郷咸陽への思いにくらべれば大したものではないだろう）。賈島の心の内はというと、長い間幷州に旅住まいをして、遠く故郷を離れているのを残念に思っていたのである。（ところが）今、ただ故郷に帰ることができないばかりでなく、かえって、北の方へ向かって桑乾河を渡ることになり、ふりかえって幷州を遠く眺めると、さらに、（この幷州の地も）故郷（のように、遠く離れる地となるわけ）である。その幷州にさえとどまることができないのに、まして（故郷の）咸陽に帰ることなどどうしてできるだろうか（、いや、ますます難しくなるのだ）。これが賈島の心の内である」と。

解答

(一) ここ幷州での仮住まいも、もう十年になる。その間、故郷に帰りたい一心で、明け暮れ故郷・咸陽を思い続けてきた。

(二) 幷州滞在中に育まれた、その土地や人々への懐かしさ。

(三) 王世懋が、謝枋得は賈島の真意を理解していないと思ったから。

(四) この賈島の詩は、賈島が幷州を故郷のように慕っていると解釈するのか、どうか。

(五) 旅住まいの幷州にさえとどまることができないのに、まして、故郷の咸陽に帰ることなどできはしない。

㈥　賈島は、故郷・咸陽からますます遠ざかるのを嘆いている。

【問題】（自習）

出典…高樹のぶ子『あるためらい』／東京大学　92年

文章略解

昭和二十一年生まれの私は、敗戦による価値観の根底的な転換をリアルに感じていないということにずっと負い目を感じてきた。しかしながら、戦争体験者同士の共感を共有できないというコムプレックスは、逆に言えば戦後生まれの者のなしうる最も誠実な戦争理解であり、これは戦後生まれの中でも比較的老いた世代のものだ。とはいえ、やはり直接の体験は、その後の人生にたとえ否定的でもはっきりとした輪郭を与える大きな力である。

解答

(一) 自分の生に関しての根本的な判断基準が全否定され、何に依拠して人生を送るかの指針が見失われた状態。

(二) 戦争体験者間の共感は、その体験がない自分には本質的な理解が十分にできないのではないかと不安を感じていること。

(三) 戦後生まれの者も戦争に無関心ではなく、戦争体験の欠如に引け目を感じるほど敏感だと筆者は意識しているから。

解説

(一) ここでの「価値観が根底から揺らぐ変転」とは、具体的には「敗戦による変化の一線を越えるとき」（3行目）に基づくものである。しかしながら、その後の問題文の叙述の中で「飢餓感」（5行目）などと並列されていることに鑑みれば、そこまで具体的に捉える必要はないであろう。ただし、この傍線部分の後に「意識の世界としては敗戦時の動揺」（8行目）と並列されていることから、この「価値観」が（肉体的なものではなく）意識的・内面的なものであることは押さえる必要があろう。このことは4行目に「内側に生じた摩擦」と述べられていることからも明らかである。解答例ではこれを「自分の生に関しての根本的な判断基準」としてみた。

これに相当する内容があればいい。

あとはそれが「根底から揺らぐ」ということを文脈に即して言い換えることだ。これに関しては、前述の「判断基準」が「全面的」に動かされたというニュアンスがあればいいだろう。

以上二点が含まれた解答ならば基本的にＯＫだ。

㈡　傍線部分に表現された心情をクリアーに打ち出すためには、①この「負い目」が何に対してのもので、②そしてその「負い目」がどのような内容のものなのかをはっきりさせることがポイントになろう。

①に関しては、直前に「戦争体験を持つ者同士の暗黙の握手と相互慰撫の視線」とあるところを一般的に言い換えれば事足りる。要は「戦争体験者相互の共感」ということだ。

むしろ難しいのは②であろう。これについては、直後に「勿論、体で知ることのなかった負い目である」（14～15行目）とされた上で、異性間の相互理解にまつわる事情が類比されている。その中の「お互い本質的なところで異性が解らないと感じる」（15行目）・「それでもなお理解に過不足があるのではないかとの迷いが残る」（16行目）などの表現から察するなら、この「負い目」が「理解」の程度に対する「迷い」であることがわかるだろう。解答にはこのニュアンスがほしい。単に「戦争体験を持たないこと」それ自体を「負い目」としているのではなく、その理解の深さに対する「負い目」であることに注意されたい。

㈢　傍線部分にある「このようなまなざし」とは、㈡で検討した傍線部分**イ**の、「いくらかの負い目を感じながら眺めているしかない」まなざしのことである。筆者は直後でこれを「ためらいのまなざし」と言い換え、さらに「自画自賛して言えば、平和のうちに育てられた人間の誠実さのあらわれでもある」（21行目）とも述べている。まずはこれを踏まえることだ。

その上で、この設問において説明すべき事情はこの「まなざし」を戦後生まれの世代が持っていないのではないか、という「大人たち」＝戦争体験者の誤解である。これを説明するためには「このようなまなざしを持たないのではないか」という表現を掘り下げていけばいいだろう。傍線部分直後で筆者が「いつまでも戦争を知らない子どもたちの立場に置いている」と述べていることから推せば、この「まなざしを持たない」という誤解は「戦争に無関心な、未熟者たち」という理解として受け取れよう。あとはこれを裏返せば解答の核はできる。要はこの「ためらいのまなざし」は戦後生まれにできる精一杯の戦争理解なのだ、という筋が押さえられ

ていればいい。

この問題文全体が「コムプレックス」「負い目」に関するものなので、それに相当する内容（解答例では「引け目」）を含んでいれば「文章全体から判断して」という設問の指示にも合う。

【問題】（自習）

出典…謝肇淛『五雑俎』事部「古之相者」　／　オリジナル問題

書き下し文

古の相たる者は、権を怙(たの)むを病ひ、今の相たる者は、権無きを病ふ。其の病は均しきなり。然れども寧ろ権を怙むを以て相を易(か)ふとも、相を抑ふるを以て権を廃すること無かれ。相たる者は天子より下なること一等のみ。天下の重き、兆民の衆きを以て、之を一相に責む。仮すに権を以てせずんば、権将に安くに施さんとするや。堯舜を畎畝の中より抜くに、四凶を誅し元愷を進め、惟だ其の為す所のままなるのみ。此より下は即ち桓公の仲父に於ける、昭烈の武侯に於ける、苻堅の王猛に於ける、猶ほ然るなり。而(しか)も国治まり民安く、天下万世、以て非と為さず。末代の君臣、上其の下を疑ひ、下も亦た自ら疑ひしより、既に其の賢否を択ぶ能はず、又其の才用を畢(お)ふる能はず。天子既に中より之を沮み、群臣又旁より之を撓む。其の身を安んぜんことを求むとも、得べからざるなり。何ぞ天下を治むるに暇あらんや。

現代語訳

古代の宰相であった者は（自分自身が）権力をたよりにする〔＝権力に溺れるようになる〕のが心配で、現在の宰相たる者は（自分に）権力がないのが心配である。（両者は一見相反するようであるが）その害は同じことなのである。しかし、（宰相が）権力をたよりにするという理由で、宰相を交代させるとしても、宰相を抑えるという理由で（その）権力をなくしてはいけない。（なぜならば）宰相は天子より（地位が）低いことは一等だけなのである〔＝宰相は皇帝の次に地位が高いからである〕。社会の重責、（すなわち）国民の統率、こういったことの責任を一人の宰相に負わせているのである。（だから宰相に）権力を仮に与えておかなかったならば、（一体）権力をどこに〔＝他の誰に〕与えようというのか。（古代の聖王）堯帝は（後継者の）舜を田舎の中から選び出したが、（その舜は）四人の悪人を罰し、善良で温和な人々を高い地位に進ませるなど（したが）、（堯帝は舜が）することのままであった〔＝したいようにさせた〕。この後は、斉の桓公が管仲に対する、昭烈皇帝（劉備）が諸葛孔明に対する、苻堅が王猛に対する（君主が全幅の信頼と権限を宰相に置いた関係は）、やはりそうである〔＝堯舜の関係と同じようである〕。（それで）しかも、国が治まり民も安らかに（暮らせ

たのであるし）、その当時の天下の人々及び後世の人々も、それ〔＝宰相に絶大な権力を与えること〕を間違いとは考えないのである〔＝正しいこととしたのである〕。（ところが）末世の（国が衰退した状態の）君と臣の関係では、君〔＝皇帝〕がその臣〔＝宰相〕を疑い〔＝信頼を寄せず権力も与えず〕、臣〔＝宰相〕も自分自身で（権力を維持する能力が自分にあるかどうかを）疑った〔＝自信をなくした〕ことから、その〔＝宰相の〕賢明であるか否かを選び（決める）ことができず、（また宰相自身も）その才能を全うすることができなくなった〔＝才能を十分に発揮することができなくなった〕。（これは）天子〔＝皇帝〕が内部から〔＝直接〕宰相が権力をふるうことをさえぎり、多くの臣下たちが（さらに）わきから〔＝間接的に〕宰相の権力を弱めるのである。（これでは）その〔＝宰相自身の〕身を安定させよう〔＝安全な状態を求めよう〕としても、できないのである。どうして（このように宰相から権力を奪っておいて）天下を治めるだけの余裕があるだろうか（いやそんな余裕はない）。

解答

(一) 権力を笠に着るという理由で宰相を交代させるのはまだよいが、宰相を抑えつけるために権力を取り上げてはならない。
《別解》宰相を圧迫するために権力を取り上げるほどなら、いっそ権力を振り回すという理由で宰相を交代させるほうがよい。

(二) 天下万民を治める重責を一人の宰相に負わせること。

(三) 宰相は自らの才能を十分に発揮することができない。

(四) 宰相の権力が制限され弱い立場に置かれるため、国事を行うよりも保身に力が割かれるから。

解説

(一) 「相」が宰相のことであるのは、人名に対する注を見れば分かっただろう（「相」（宰相）は漢文の重要語だ）。皇帝から政治の全権を委任され執行する存在で、官僚のトップ。問題文中にも述べられているが、その地位は皇帝に次ぐ。傍線部の文型（句法）は、「選択形」で、「寧A、無B」の形をとっている。「むしろAすることはあっても、Bはするな」ということを示す選択文型の代表的

な表現だ（「Bするぐらいなら、Aしてしまえ」ぐらいが自然な口語か）。これが現代語訳の枠組みになる。後は個々の表現を見ていく。「怙レ権ヲ」は、「権力を頼り（当て）にする」こと。解答では「権力を笠に着る」としておいた。「易」は、「貿易・交易・改易」などの熟語が想起できれば、「取り換える」「変える」といった意味であることが推測できよう。したがって、「易レ相ヲ」は「宰相を交代させる」こと。「抑レ相ヲ」は字義通り。「廃レ権ヲ」は「権力を廃止する」ことだが、その意味を汲んで、「権力を取り上げる」としておいた。「怙レ権ヲ」宰相を「抑」えるための処置だからである。

最後に「以」の意味だが、この場合「怙権」と「易相」、「抑相」と「廃権」との関係を考えればよい。前者は「所以」（理由）で、後者は「目的」である。

(二) 傍線部を含む文は「以……動詞ニ之ヲ補語ニ」という形をとっているが、これは客語が長い場合の変形パターンだ。「動詞ニAヲBニ」という文で「A」の部分が長い場合、目的語を示す「以」を使ってこの「A」を先に押し出し、動詞の下に客語「A」のあったことを示す「之」を挿入しておくのである。したがって、傍線部は「天下の重き、兆民の衆きを一相に責む」という形にして考えた方がわかりやすい。

「相」は話題から「宰相」とわかる。「一」は人物名詞を修飾しているので、当然「一人の」の意。ポイントは「責む」の解釈だ。この動詞は「人を責む」のように、人物を客語にとれば「批判する・咎める」の意味になるが、人物を補語にとり事象を客語にとった「AをBに責む」とした場合は、「AをBに負わせる」の意となる（例えば「任を人に責む」＝「責レ任ヲ」）。したがって、「天下の重き、兆民の衆き」を、「一人の宰相に負わせる」とわかる。残るは、「天下之重、兆民之衆」の解釈である。「A之B、C之D」という形をとり、「A」と「C」、「B」と「D」が類語になっている点に注目。これは互文の一種で、例えば「千変万化」＝「千万の変化」のようにくくって一体化できる。この場合は「天下兆民の衆重」となろう。「兆民」は「万人」と同じで全国民の意。よって「天下兆民」は、全社会の国民。これに対する「衆重」を考える。「衆」は「集」に等しく「束ねる」こと。つまり「統率」することである。国民を統率する役目における「責」は「重責」とわかる。よって、この部分を直訳すると「社会の重責、（すなわち）国民を統率することを～」となる。これを先の「責之一相」の訳に組み込んで、端的にまとめれば解答のようになる。

(三) まずは、傍線部に含まれる指示語「其」が何であるかを明らかにすることだ。直前の「其賢否」の「其」も同一のものを指すが、

これはその前の「臣」「下」、つまりこの文で話題になっている「宰相」を指している。「才用」は「才能の使用」、「畢」は「畢竟（結局）」などの熟語からも、送りがな「フル」からも意味は取れるだろう。「終」（下二段）のことである。ただし「畢」の「おふ」は、「すっかり尽きて済む」「なくなりきる」ことでの終わりを意味するから、「畢才用」は「才能を出し切るまで使う」こと、すなわち「十分に才能を発揮する」意にとれる。これに「不能」が上接しているので、「発揮できない」と訳せばよい。

㈣　傍線部は、「何……哉」と反語の形をとっている。「暇」は「（仕事がなくて）あまった時間・ゆとり」の意味。この場合は「余裕」ぐらいで解しておけばいいだろう。したがって、「どうして天下を治めるのに余裕があろうか、そんな余裕はない」というのが、傍線部の訳である。では、なぜ余裕がないのか、逆に言えば何をしていて余裕がないのか、これを文脈に即して検討してみよう。

傍線部は直前の「求安～身」を受けている。この部分は「自分の身の安定を求めてもできない」という内容。これを裏返せば、自分の身を安定させる（つまりは、保身だ）ことに力が割かれて世の中を治める余裕がない、という流れになっているのがつかめよう。では、なぜ「自分の身の安定を求めてもできない」という状況に置かれるのかと言えば、さらにその前の「天子～撓之」が原因になっている。この「天子～撓之」の部分は、中（＝「宰相」を任命する君主）も、旁（＝「宰相」を支える群臣）も、よってたかって宰相の権力を弱めようとする、つまり宰相の権力が制限されるということを言っている。

結局、宰相は皇帝や群臣によってその権限を制限され、宰相とは名ばかりの弱い立場に立たされるので、自分の身の安全を考えなければならず、そちらに力が割かれて世の中を治める余裕がない、ということになる。ちなみにこのことは、冒頭の「今之相者、病於無権」にまさに合致している。

以上のような内容をまとめればよい。